

「武庫川国文」第八十五号 抜刷
平成三十年十一月一日 発行

『新可笑記』 卷一の三「木末に驚く猿の執心」の検討

―家光・忠長の将軍位継承争いと武士のあり方―

羽
生
紀
子

『新可笑記』 卷一の三「木末に驚く猿の執心」の検討

―家光・忠長の将軍位継承争いと武士のあり方―

羽 生 紀 子

はじめに…『新可笑記』の三層構造

『新可笑記』は井原西鶴の浮世草子第十一作で、元禄元年（一六八八）十一月の刊行である。私は、別稿^{〔注1〕}において卷一の「理非の命勝負」をとりあげ、従来指摘されていた素材を検証すると共に、新たな素材を加えて、卷一の「一が重層性を有していることを明らかにした。具体的には、話に草薙の剣盗難事件が重ねられていること、またその意味を解明し、卷一の「一」の三層構造を明らかにした。第一層は故事や伝説・逸話などの素材（従来典拠や素材として指摘されてきた類のもの）、第二層はさまざまな素材を自在に駆使して創作した具体的な話、第三層は西鶴の最も描きたかった「重層世界」ということになる。重層世界は創作の根本的な発想と言えるものであり、創作主題を示すものである。さらに別稿^{〔注2〕}で卷一の二「一つの巻物両家にあり」を検討し、卷一の「一と同様に三層構造を読み取ることによって、卷一の二の新しい読みを提出した。具体的には、素材を新しく指摘し、本話の創作のあり方を明らかにした上で、そこに南北朝正閏争いが重ねられていること、またその意味について論じた。

この三層構造は、『新可笑記』の全二十六章すべてについてい

ることである。本稿では、卷一の三「木末に驚く猿の執心」について検討する。卷一の「一」と「二」は、朝廷をいただく神国日本における武士という関連で一つのまとまりを示していたが、卷一の三は、徳川幕府における武士のあり方を取り上げている。本稿では紙数の都合もあり、卷一の四「生き肝は妙薬のよし」には触れることはできないが、卷一の三と四は、徳川幕府における新しい武士のあり方を取り上げるといって、一つのまとまりを持っている。西鶴は卷一の「一」と「二」で取り上げた神国日本における武士に対して、卷一の三と四の二章では、徳川幕府における武士を対比して描いているのである。

以上の観点から、本稿では卷一の三の重層世界を明らかにし、徳川幕府における武士のあり方がどのように描かれているかについて論じる。

卷一の三のあらすじ…忠と義をめぐる

前章卷一の二「一つの巻物両家にあり」は、義を重んじる存在としての武士を取り上げていた。楠木の末葉を名乗る二人の侍は、義に対して同じ心を持っていた。本章でも義の問題を取り上げている

が、義の内容が、自己の信念という意味合いから忠義・主命へと変化している。また大名の二人の息子の名代は、同じ心を持たず思惑が異なり、一方は新しい忠義を学び、他方はそうではなく従来の義のまま押し通すというように展開している。そのような義から忠義への時代的な変化についての追究が本章の主題であるが、その検証のために少し詳細なあらすじをとる。冒頭文と①から⑤までに分ける(注3)。

昔ある老人が「他の愁ふる時は、その心に愁ふるを正道」と言った。

①信州の大名が二人の息子の叙任のために、名代として「高家衆」二人を京都へ派遣する。無事編旨を頂戴し、京都の七条の屋敷で留守居役に「勅宣」を披露したが、突然現れた「大猿」によって、長男の名代の編旨が奪い去られた。

②長男の名代は切腹の覚悟をして、家来に「国なる妻子立ち退く事なかれ！御咎め次第になり行くべし」「母には病死となりとも」など伝えるように申しつけた。最後の場所は洛外の寺、「願はくは真言宗なれば殊更」だと願った。その場に居合わせて聞く人はしばし静まり、「大身は世の聞きをはばかり、小身は存じながら指図なり難し」。その時、屋敷守が愚案を申し上げた。

「これ私ならず、御家の滅亡すべき始めなり。まったく御自分の誤りなし。ひそかに御国へ下り給ひ、御沙汰の上に安否を極めらるべし。これ忠義のふたつなり。京都の切腹御ためならず。主命なれば、この節あひ延ぶる事、かつてその身の卑気ならず。主君の御名代は重し。自分の命は軽し」。

京役人たちも同じ意見なので、名代は「無念を胸に沈め」切腹を思いとどまった。もう一人の同役の名代は、屋敷守の話聞き流

し、あいさつもそこそこに、「人の身の上とさのみ嘆かず」、編旨を新しい白小袖の襟にくけ込んで用心した。身勝手に見える行いで、「武士はかくあるまじき所なり。義を思はば、何とぞ分別あるべき事ぞかし」。

③都を密かに旅立ち、長男の名代は死を覚悟しながら、「信濃なる煙立つ山」の麓の村に着いた。次男の名代が旅も「今宵ばかりの名残」と入浴中、「件の猿」が再び現れ、襟にくけ込んだ編旨を奪い、長男の編旨を返し、「一声叫びて失せぬ。これまた希代なり」。次男の名代は「思案までもなく、そのまま自害」した。

④死に覚悟だった長男の名代が帰国して、殿に事情を説明していると、そこへ「孤猿叫んで顕れ」「国の目印の太木、永代松の葉末より勅宣投げ返して失せける」。「御家中勇みをなしける」。

⑤調べてみると、「自滅せられし」名代の息子が「都の留守を願ひ」、知行地の山の猿狩りをして、「無用の殺生限りなく、子猿の命を取」っていたことがわかった。「惣じてものの命を取る事なかれ。世の人過ちあれど、飾る心よりおのづから非義をなし、いよいよ^{あやま}錯りを改めざるもの多し」。そこで孔子も、「人なるを以て鳥にだも如かざるべけんや」と言ったのである。

巻一の三の素材…上杉謙信・上杉長貞・猿の復讐譚・

『山鹿語類』

冒頭の老人の言葉については、諸注に『実語教』の「他人ノ愁ヲ見テハ、即チ自ラ共ニ患^{うれ}フベシ」を典拠として指摘している。その点に異論はないが、単に語句の類似の指摘にとどまっており、『実語教』がふまえられた意味については触れられていない。②で同役

の名代が「人の身の上とさのみ嘆かず」であつたのを、身勝手な態度・行為を取つたことを指している」と解釈することで十分だとみているのであろうか。

しかしながら、初学者向けの教材として普及していた『実語教』の一文を麗々しく冒頭に掲げることには不可解さが伴い、西鶴の作意が感じられるのである。その作意の一つは、『実語教』という初学者向けの教訓書をあえて掲げて、本話が教え・学ぶということにかかわることを意識させることだと思ふが、これについては後述する。もう一つは、初学者向けの教訓という内容の上での落差から、違和感を抱かせることであらう。冒頭文には『実語教』とは異なつて「正道」とある。前章では楠木正成はじめ、義に生きた武士を素材としていた。それは「武士の正道」と言うべきものであつた。『愁』の内容は、初学者向けの教訓としてならば、悲しむとか辛いとかの理解しやすいものを指しているのであらうが、武士にとつてのそれということになれば、義とか生死に関わる重大なものではない。

②の同役の名代の「武士はかくあるまじき所なり。義を思はば、何とぞ分別あるべき事ぞかし」を想起させるのは当然として、その義を思つてする分別とは何かを考える必要がある。そのように考えると、『実語教』の文章は、義に関わる逸話を想起させるためのシグナルであることに思ひ至るのである。「他人ノ愁」を自己の愁いとして、義の「正道」ともいえる行いをした逸話ということになれば、上杉謙信が、今川・北条の塩止めで苦しんでいる武田信玄の苦境を思い、塩を止めなかったという、有名な義の逸話が想起されるのである。

『春日山日記』(二五ノ上四)には、次のようにある。

武蔵相模ヨリ上州信濃へ、塩ヲ一向ニ停止シテ遣ハサズ、信玄ノ領甲州信濃西上野、何レモ海ナキ国ナルニ仍ツテ、三ヶ国ノ諸人迷惑是非ニ及バズ、謙信公此ノ事ヲ聞キテ、法ヲ定メ置キ、代物等自然高直ニ売り申ス者候ハゞ、有体ニ仰セ聞カサルベク、其ノ段急度申シ付クベシ、三ヶ国ノ人、自由ニ用事足り候程、何程モ塩入レサセ申スベキ由仰セ遣ハサル、信玄聞入レ、大悦感謝スルニ詞無キ由、委細ニ書ヲ以テ返答ス、馬場高坂ヲ始メトシテ、信玄麾下ノ侍、大小上下ハ云フニ及バズ、三ヶ国ノ民百姓ニ至ル迄、悉ク皆旨ヲ聞キテ公ノ仁心ノ厚キヲ感じ、何レモ歎喜ノ涙ヲ流サズト云フ事ナシ

この故事から「敵に塩を送る」という成語が成立したのであろう。たとえ謙信が塩を送つたという事実がなかったとしても、謙信の義の逸話は、人口に膾炙していたと考えられる。読者が義とは何かということを考えさせられる時、ここで謙信に思い至らなかつたとしても、①の高家衆二人が京都へ派遣されるというところで、もう一度シグナルが出され、必ず謙信に思い付くことが求められているのである。ことさらに謙信の義の逸話を強調するのは、本話に取り上げる忠義との違いを考えさせようとするものであろう。

いづれにしても冒頭文からは謙信が想起されるが、それは謙信の義の逸話とともに、その家督相続の話をも想起させるということである。謙信(景虎)は、越後守護代長尾為景の三男であつたが、天文十七年(一五四八)長兄晴景に代わつて景虎を守護代に擁立しようとの動きが盛んになり、同年十二月三十日、守護上杉定実の調停のもと、晴景は景虎を養子とした上で家督を譲り、景虎は十九歳で

守護代となっている。これは本話に対比されるもので、後述するように重層世界に到達させるシグナルである。

①③④は間に②を挟んでいるが、ひとつながりと考えられる。高家衆二人が京都へ派遣される話の素材は、『玉露叢』卷十九^{注4}、『玉滴隠見』卷十五^{注5}、『諸家深秘録』「御高家上杉宮内太輔殿、同伊勢守父子自害ノ事」^{注6}が指摘されている。本話には、御高家上杉宮内太輔の綸旨紛失と自害の事件を素材としていることを示すシグナルがいくつかある。冒頭文や「信州の大名」から「上杉」を想起し、「高家衆」の派遣、綸旨の紛失、切腹などから、読者が、高家上杉宮内太輔長貞の切腹事件に到達することは、さほど難しいことではないのだろう。ただ、素材として『諸家深秘録』を指摘した江本裕氏は、『玉露叢』以下の三本は写本であり、武家社会におけるマル秘記録に近いものであると言う。西鶴も読者もこれら三本を実際には見ていないと思うが、内容的に広く知られた事件であったのだろう。西鶴がどの程度事件の内容を把握していたかは不明であるが、その素材としての利用の具体相からは、おそらく最も詳しい『諸家深秘録』程度の内容を把握していたと考えられる。『諸家深秘録』の内容は次のようなものである。

御高家衆の上杉宮内太輔長貞の父畠山源四郎長員が、上杉謙信より苗字を授けられ、上杉氏を称するようになった。

寛文二年壬寅十二月三日、長員終ニ自害シ畢。其子細ハ、長貞御使トシテ上京之レ有リ。事畢テ帰路ノ処ニ、御書箱ヲ取失ヒ申サレシガ、品川ヨリ宿次ヲ以テ卒ニ伝奏衆ヘ申達セラレ、往来八日ニシテ、亦綸旨到来ス。則之ヲ差上ラレ、事相済テ切腹シ玉ヒケルト也。

長貞の嫡子長之が家督を相続し、伊勢守と改めたが、天和四年、乱心して自害した。

なお、上杉長貞の京都への使いは、『寛政重修諸家譜』には新院御所落成の賀使として派遣されたとあり、『嚴有院御実紀』寛文二年十月二十三日の条には次のようにある。

高家上杉宮内太輔長貞京の御使にさ、れいとま下さる。これ新院御所落成、御移徙を賀せられてなり。よて新院に巻物二十。銀式百枚進らせ給ふ。

次に、猿が綸旨を奪い、また返すという話の素材は、『古今大著聞集』九の二三「猿、己か子の敵を取事」であると指摘されている^{注7}。人間の子を借りて、報復後に子を親元へ返すところは、綸旨を奪い戻すところと共通する。

富士根方村井死木切山の百姓、当歳子をか、へ、田の畔に居て、男も女も畑を打ける所に、大猿二つ来て、彼子をつれて行、大木の梢にのほり、此子をなかせける

か、る所に鶯、峯の方より、おとしかけ、上にて舞ける時、彼子を木のうつほ成所に居て、二疋の猿、大枝を引たわめ、其陰にかくれしを、鶯、近々と来りて、とらんとする所を、枝を、はねかけられハ、鶯の正中に当て落けると、ひとしく、猿、件の子をいたきとりて、もとの所につれ来り、一疋の猿ハ、落たる鶯を引もて来、其子かかたはらに置、峯に帰りし

されハされハ、其比、彼猿、子を鶯にとられて喚ひし、其子の敵を取けるなるへし、鶯の落たりしを、子の根にもて来りしハ、礼の心にか

か、る生類すら、我いき通りハ報をかし、増て、人として、親

族の敵など、ミのかし聞のかすハ、猿にハ、おとれり、たしなむへし（注8）

②は本章の重要な部分であるが、従来素材が指摘されていない。それは逸話などではなく、素材として、義についての考え方を取り入れているからではないだろうか。西鶴は武士のあり方に関して、山鹿素行などの言う倫理的武士道を理解していたと考えられる。巻一の一の登場人物である侍の「死は理」とする考えを否定し、「理のための死」とする考えを支持していた（注9）。

山鹿素行の主張する士道は、西鶴の『武家義理物語』の序文にいう武士のあり方そのものである。「その家業、面々一大事を知るべし」「自然のために、知行を与へ置かれし生命を忘れ：自分の事に一命を捨つるは、まことある武の道にはあらず」は、『山鹿語類』の次の文章に似る（『新編日本古典文学全集』『井原西鶴集④』頭注にも指摘がある）。

こ、に生生無息の人、或は耕して食をいとなみ、或はたくみて器物を作り、或は互に交易利潤せしめて天下の用をたらしむ、是農工商やむを得ずして相起れり、而して士は耕さずしてくらひ、造らずして用い、売買せずして利たる、その故何事ぞや…この後に、武士の職分について述べる。

自我職分を糾明し得んには、士たるの職こ、に明なるべきなり、凡そ士の職と云は、其身を顧み、主人を得て奉公の忠を尽し、朋輩に交て信を厚くし、身の独りを慎で義を専とするにあり、而して己れが身に父子兄弟夫婦のやむを得ざる交接あり、是又天下の万民各なくんば有るべからざるの人倫也といへども、農工商は其職業に暇あらざるを以て、常住相従て其道を尽くし得

ず、士は農工商の業をさし置て此道を専つとめ、三民の間苟くも人倫をみだらん輩をば速に罰して、以て天下に人倫の正しきを得つ、是士に文武之徳知備えずんばあるべからず（『山鹿語類』巻二十一「士道／立本／知己職分」）

論旨を奪われた名代が、「国なる妻子立ち退く事なかれ」「母には病死となりとも」など伝えるように言いつけるところは、『山鹿語類』の「父子兄弟夫婦のやむを得ざる交接あり、是又天下の万民各なくんば有るべからざるの人倫也」という考え方をふまえていると言える。屋敷守の愚案に見える「これ私ならず」「御自分の誤りなし」「御沙汰の上に安否を極めらるべし。これ忠義のふたつなり」「主命なれば」「その身の卑気ならず」「主君の御名代は重し。自分の命は軽し」などは、やはり『山鹿語類』の「主人を得て奉公の忠を尽し、朋輩に交て信を厚くし、身の独りを慎で義を専とする」を具体的に詳述したものであろう。なかでも「これ忠義のふたつ」は、『山鹿語類』の「主人を得て奉公の忠を尽し」と「身の独りを慎で義を専とする」の二つをふまえているのであるが、それを「これ私ならず、御自分の誤りなし。ひそかに御国へ下り給ひ」と主命を果たすこと、「御沙汰の上に安否」と自分一人判断ではなく、主君の判断を求めることとして注目に注目すべきである。忠と義のふたつが、主命と主君の判断という、個人的な信条とは異なったものとなっているのである。

さらに、もう一人の同役の名代が、屋敷守の話を聞き流し、「人の身の上とさのみ嘆かず」と身勝手に見え、「武士はかくあるまじき所なり。義を思はば、何とぞ分別あるべき事ぞかし」とあるところ、は、全く人のあり方を学ばないということ、やはり『山鹿語類』

卷三十四「聖学二／致知／師教／立教／論教之説」が素材であると考えられる。ここの「義を思はば」は、『山鹿語類』の「朋輩に交て信を厚くし」^{注10}という信義を指しているのである。

人教エザレバ乃チ道ヲ知ラズ、道ヲ知ラザレバ禽獸ニ同ジ（『聖教要録』には、「乃チ禽獸ヨリ害アリ」）

以上の意味から、『山鹿語類』の士道・師教についての考えを②の素材として取り入れたと考えてよいと思う。

⑤で、名代の息子が猿狩りをして、「無用の殺生限りなく、子猿の命を取」というところは、徳川忠長の猿殺しの不行跡を暗示しているという^{注10}。少し時代が下るが、伝聞を集めた新井白石の『藩翰譜』（元禄十五年（一七〇二）成立）十一巻に次のようにある。

十一月五日の日当国浅間の山に入て、猿ども狩らせて御覧あるべき由をふれらる、（中略）永く殺生禁断の結果たり、かゝる狩くら有らんこと、神冥の恐れ少なかるべからずと、止め参らする人々も多かりしに、我すでに此国のあるじたり、縦令いかなる神なりとも、我が地に宮居しめ給はんには、いかで我が命に従ひ給はざらんやと仰せあつて、同十一日数万の勢子、山々谷々に追ひ入て、猿ども狩り出さる、猿凡そ一千二百四十余頭を取つて帰らせ給ふ

「世の人過ちあれど、飾る心よりおのづから非義をなし、いよいよ錯^{あやま}りを改めざるもの多し。ここを以て孔子も、「人なるを以て鳥にだも如かざるべけんや」と言へり」と本話を結んでいるが、諸注に次のように典拠を指摘している。

「過ちあれど、飾る心よりおのづから非義をなし」

子夏曰く、小人ノ過チヤ、必ズ文^{かざ}ルト（『論語・子張篇』）

「いよいよ錯^{あやま}りを改めざるもの多し」

子曰く、過チテ改メザル、是ヲ過チト謂フト（『論語・衛霊公篇』）

「人なるを以て鳥にだも如かざるべけんや」

子曰く、止マルニ於イテ、其ノ止マル所ヲ知ル。人ヲ以テシテ鳥ニタモ如カザルベケンヤト（『大学・伝三三』）

『論語』や『大学』をふまえた文章で本話を結ぶのは、先に触れた『山鹿語類』卷三十四「聖学二／致知／師教／立教／論教之説」を、それら權威あるものを素材として具体的に言い換えたものであろう。『山鹿語類』には次のようにあった。

人教エザレバ乃チ道ヲ知ラズ、道ヲ知ラザレバ禽獸ニ同ジ（『聖教要録』には、「乃チ禽獸ヨリ害アリ」）

『論語』の「止マル所ヲ知ル」は、敬・仁・孝・慈・信の至善を指すが、正しい至善を学びとるということ、『語類』の「道ヲ知」ること、正しい道を学びとることに重なる。何よりも教え学ぶ文章ということでは共通するのである。『古今大著聞集』「猿、己か子の敵を取事」の末尾「人として、親族の敵など、ミのかし聞のかすハ、猿にハ、おとれり、たしなむへし」もふまえているようにみえるが、本話は敵打ちや復讐を勧めているわけではない。後述するように、西鶴は猿の復讐譚を評価していないようで、猿の復讐譚は一種の狂言回しといえる枠組みに用いられている。基本的には『山鹿語類』の言い換えとみるべきであろう。

卷一の三の解釈…三層構造における重層世界へ

以上、本章の素材について、若干の新しい素材を加えて列挙した。それらは本話の第一層である。西鶴はそれらの素材を自在に駆使し

て本話を創作しており、本話そのものも十分に鑑賞に堪えるものとなっている。これは第二層ということになる。しかし、西鶴は単に素材を翻案したり改変したりして話を創作することを目的としていたのではなく、素材に、ある作意をもっていくつかの要素を付加したり、逆に削除したりして話を作っている。それは本話にもう一つの重層世界を重ねようとするためである。それは第三層ということになる。その重層世界によって、西鶴が描こうとしたものは何かを理解しなければならぬのである。

素材（第一層）を自在に駆使して作られた本話（第二層）に、どのような付加・改変が施されているのかをしてみる。全体を教え・学ぶという教育的な話として構成しているのであるが、そのために、大きくは次の四項目の付加・改変を行っている。

(1) 義の問題を、忠義・主命との関わりで取り上げる。

(2) 京都への使者を、一人から二人に変えて、異なった行動をとらせる。

(3) 猿の奪い去り戻すという行為を、一度から二度に変えている。

(4) 『実語教』や『山鹿語類』を、『論語』や『大学』に対比させている。

まず(1)冒頭文「他の愁ふる時は、その心に愁ふるを正道」と『実語教』をふまえることで違和感を抱かせ、戦国時代の上杉謙信の義を想起させた。『実語教』という初学者向けの教訓書から、より高度な講義録ともいえる『山鹿語類』へ展開させ、上杉謙信の義から、泰平の世の倫理的な忠義・主命への変化を妥当なものであると教えるようにしている。

そのために(2)素材の上杉長貞を、二人の名代に変えている。息子

二人の叙任のための名代としたことは、前章の楠木の末葉を名乗る二人の侍を受けており、また上杉謙信兄弟（晴景・景虎）をふまえるのである。それらは第三層にかかわるものである。ここでは、それぞれが義に対して異なった行動をとり、長男の名代が、義の忠義・主命への変化を教えられ、それを受容するのに対して、次男の名代は、新しい義のあり方を全く学ばないで「自滅」してしまっているのである。その名代二人に違った行動をさせるための狂言回しともいえるべきものが、(3)である。素材では、猿は奪い去り戻すという行為を一度しかしていない。猿の復讐譚であるならば、あらずじの⑤でわかるように次男の名代に対してなされるべきものであろう。初めに次男の名代の論旨を奪えば、次男の名代は自害したに違いない。初めに長男の名代の論旨を奪ったのは、本話の眼目であるあらずじ②を付加し、忠義・主命を学ばせるためとしかいいようがない。猿の復讐譚を利用して奇談めかしているが、ある意味で時代の流れを象徴させたものであると考えられる。(4)では、『山鹿語類』の「人教エザレバ乃ち道ヲ知ラズ、道ヲ知ラザレバ禽獸ニ同ジ」が、『論語』『大学』などの権威あるものにも同様の趣旨で記されていることを付加しているのである。

第二層は、素材以上のような作意を加えていた。それは、武士は『山鹿語類』に見える「奉公の忠を尽し、朋輩に交て信を厚くし、身の独りを慎で義を専とする」存在で、「苟くも人倫をみだらん輩をば速に罰して、以て天下に人倫の正しきを待つ」ものであることを、具体的な話として提示したということである。武士の存在は、第一が忠義で、第二に人倫をただすものであるが、常にそれを学び、実践することを求めているのである。

さて、西鶴は第二層の上に第三層である重層世界を重ねている。あらずじ⑤において、次男の名代の息子が、知行地の山の猿狩りをして、「無用の殺生限りなく、子猿の命を取」っていたことがわかったとあった。徳川忠長の猿殺し事件を一旦素材としてあげておいたが、実は単なる素材にとどまらず、重層世界を暗示するものである。⑤以外で、家光と忠長兄弟に関わることを示すいくつかのシグナルがある。

冒頭文から想起される上杉謙信の家督相続は、守護上杉定実の調停のもと、長兄晴景が三男景虎を養子とした上で家督を譲り、景虎は十九歳で守護代となっている。戦国の世の実力による家督相続なのであるが、正道としての義と矛盾しないように、一旦養子にするなど、形式的ではあるものの、父子、長幼の順に則った正統な家督相続となっている。家光・忠長兄弟が学ばねばならないものとしてふまえられているのであろう。

①の上杉長貞の京都への派遣は、新院御所落成の賀使として派遣されたものであったが、それを兄弟の叙任のための使いとしている。時代は前後しているが、元和九年（一六二三）七月二十七日、家光は秀忠とともに上洛し、伏見城において正二位内大臣、征夷大將軍の宣下を受ける。同日、忠長は従三位中納言に叙任されている。「高家衆」は幕府における儀式や典礼を司る役職である。

②では、「真言宗なれば殊更なり」とあるのは、徳川氏が三河一向一揆の時、一向宗を禁止していたことを匂わせたものである。「大身は世の聞きをはばかり、小身は存じながら指図なり難し」は、秀忠の死後、家光・忠長の両派に大小名が分かれて成り行きを見守ったと言われていることを想起させる。『藩翰譜』には、加藤忠広父

子を絡めた謀反の噂などが記されている。

猿に関しては、「大猿」、「件の猿」、「孤猿」と三度現れ、③の「信濃なる煙立つ山」は、忠長の浅間山の猿殺し事件を匂わせ、④の「国の目印の大木、永代松」では松平氏の象徴の松を匂わせる。ここに至ると、猿の復讐譚ではなく、霊獣を殺したことによる浅間神社の神罰という意味合いが大きくなっている。

⑤の「自滅せられし人」は、家光に命じられた忠長の高崎での自害を、「都の留主を願ひ」は、忠長が大坂城を所望したことなど、家光と忠長兄弟の争いを想起させるものである。

第二層の本話に重ねられた重層世界は、家光と忠長の將軍位継承争いであることは明白であろう。將軍位継承争いは、武士のあるべき姿を浮き彫りにする。忠長の行為は否定されるべきものとして取り上げられているのである。徳川幕府のもとでは、兄弟の関係よりも、主従の関係が優先する。武士は忠義・主命を重んじ、人倫の鑑となる存在であるべきで、それは兄弟の間にも当てはまるのである。都の屋敷の留守居役を願い、所領の山で猿狩りをして無用の殺生をしたのは、まさに忠長である。忠長は家光（主命）に従わず、何ら学習することもなく、自己の立場を自覚することなく、自滅したのである。それは古い戦国の時代の武士のあり方であった。

章題「木末に驚く猿の執心」は、素材である『古今犬著聞集』九の二三「猿、己か子の敵を取事」に「大猿二つ来て、彼子をつれて行、大木の梢にのほり、此子をなかせける」とあって、「大木の梢」で驚に復讐して、子猿の敵をとることをふまえている。章題は、その復讐譚をどのような意図で取り上げようとしたことを示すのであろうか。「驚く」は不可解な語で、その珍奇さに驚くということでは

あるが、復讐することを「執心」と表現したのは何故だろう。執心という語は仏教語で、例えば、次のように用いられる。

何のわざをかかこたむとする。仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり（『万丈記』）

執心は、よい意味では用いられないのが普通で、「執着するな」など、何かを戒めるようなときに用いるものであろう。西鶴は猿の復讐を評価することなく、何かにこだわることを戒めるために利用したのではないか。

本話には「木末」は出てこない。猿が現れるのは、「庭山の木隠れより」「件の猿あらはれ：杉むらの内に入る」「国の目印の大木、永代松の葉末より勅宣投げ返して」とあって、「木末」に近いのは、勅宣を投げ返す「永代松の葉末」である。表面的には、「御官位子細なく、喜悦の御祝ひ重なり、御家中勇みをなしける」と、兄弟の叙任が執り行われ、家中はめでたく治まっている。しかし、次男は叙任にこだわったのであった。その叙任を望む心を「執心」と表現したのではないだろうか。

忠長は五十五万石では満足せず、大御所秀忠に百万石を賜るか、大坂城の城主にして欲しいという嘆願書を送り、秀忠は無視されたと伝えられる。忠長は全く新しい主従関係について学ぼうとはしなかった、そのようなあり方を「執心」としたのであろう。目録副題「武士は不断覚悟の事」は、そのような武士を戒め、徳川幕府における新しい主従関係を、常に学び続ける覚悟を持てといっているのであった。「総じてものの命を取る事なかれ」に続けて、『大学』の教訓「人なるを以て鳥にだも如かざるべけんや」と結ぶ。たとえ猿殺しを犯しても、それを改め学ぶことが重要で、武士の存在の意味

を学習しなければ、「禽獣ヨリ害アリ」（『聖教要録』）と自戒をうながしている。

従来、本章の主題について、屋敷守の愚案に着目して、そこに教訓性をみようとしたり^{〔注11〕}、徳川忠長が猿狩りをして將軍の座を逃したことに對する、風刺が意図されているとしたり^{〔注12〕}、失つてはならない存在の武士、こうした武士を救う道理を提唱した^{〔注13〕}、矛盾した言動の武士たちの生き方を、透明なガラスケースの中に置いて味わい深く描いてみせた作品^{〔注14〕} などと論じられている。それらは、第二層である本話の解釈であるが、素材についての吟味も十分ではなく、さらに第三層の重層世界を重ねて解釈することが必要だったのである。

おわりに…徳川幕府のもとの忠義

本稿では、卷一の三に重ねられている重層世界を明らかにし、徳川幕府における武士のあり方が、どのように描かれているかを検討した。

卷一の三には、徳川家光と忠長兄弟の將軍位継承争いが重層世界として重ねられていた。戦国ではなく、泰平の世となった徳川幕府における、主命を重んじ、人倫の鑑となるべき武士の存在を取り上げていた。戦国の情緒的で人格的な義から、主従関係の中での忠義への変化を、京都に派遣された二人の名代を通して描いたのであった。その名代二人は、猿の論旨を奪い戻すという不可解な行為のために、異なった対応を取らされている。それは武士のあり方の違いを浮き彫りにしている。個人・一族を中心とする武士と、藩や幕府という組織の中の武士の違いであった。

西鶴は巻一の三では、猿の復讐譚を巧みに利用して奇談を装いながら、武士の主命への対応を描いていた。次章の巻一の一四では、生き肝殺人を巧みに利用して、謡曲の夢幻の世界の中で武士の主命への対応を描いている。巻一の三と四は、ともに奇談を装いながら、武士のあり方の変化を描いていた。奇談めいてはいるが、それは時代の流れを、奇談という装いをかりて表現したものであろう。西鶴にとって、時代的な変化は実感できても、その原因は不可思議な、表現することがなかなか困難なものであったに違いない。現代のように科学的な分析がなされる時代ではなかった。西鶴の作者としての感覚は、それを奇談めかすことで何とか説明しようとしたのである。そのように考えると、奇談めかすことは、一つの表現手法なのであろう。当時の武家政権を憚って奇談めかしたというような解釈は、当たらない。時代の変化を表現する方法が他になかったということなのである。

巻一の三は、次章巻一の一四と合わせて、二章が連続したセットともいえる形をとっている。それは巻一の一と二が、神国日本のもとの武士のあり方を描いたように、徳川幕府のもとの武士のあり方を取り上げるものであった。

注

- 1 『新可笑記』の重層性―巻頭章と草薙の剣盗難事件―と題して別稿予定。
- 2 『新可笑記』巻一の二「一つの巻物両家にあり」の読み―南北朝正闘争いと「二つの笑い」の内実―と題して別稿予定。
- 3 『新可笑記』本文は『新編日本古典文学全集』（広嶋進校注・訳）による。
- 4 中村幸彦「西鶴の組材」（『郷土研究 上方』第一三九号、一九四二年七月）

5 富士昭雄『新可笑記』（対訳西鶴全集）の注。

6 江本裕「西鶴研究ノート（二）」『新可笑記』一の三「木末に驚く猿の執心」考」（『芸能文化史』第二十五号、二〇一〇年三月）

7 橋本智子「『新可笑記』巻一の三「木末に驚く猿の執心」試論―猿の復讐譚に潜む創意―」（『学芸 国語国文学』第三十七号、二〇〇五年三月）

8 『古今大著聞集』本文は『仮名草子集成』第二八巻による。

9 前掲拙稿（注1）。

10 広嶋進「『新可笑記』の「道理」と政道批判―『可笑記』『太平記』との関わり」（『西鶴新解』ベリかん社、二〇〇九年。初出「江戸文学」第二三号、二〇〇一年六月）。

11 井口洋「『新可笑記』試論―一の二、一の三、一の五―」（『西鶴試論』和泉書院、一九九一年。初出・『ことばとことのは』第四号、一九八七年十一月）

12 広嶋氏前掲論文（注10）。

13 橋本氏前掲論文（注7）。

14 平林香織「木末に驚く猿の執心」の生と死」（『誘惑する西鶴』笠間書院、二〇一六年。初出・『岩手医科大学共通教育研究年報』第四六号、二〇一一年二月）

（はにゅう・のりこ 本学准教授）